

An Optimality-Theoretic Analysis of the Japanese Passive

(日本語の受動態の最適性理論による分析)

ルディ トート
Rudy TOET

本論文では、所与の意味の表現としての、対応する能動節と受動節の間の選択の有標性 (markedness) によるモデルを提示する。事象の参与者を表す名詞句が同一で、少なくとも一見しては同義に見えるという意味で「対応する」能動節のある受動節、すなわち直接受動節 (direct passives) を主な考察対象とし、「私は雨に降られた」のような間接受動節 (indirect passives) の成立は考察対象外とする。ただし、一見して同義に見える能動節と直接受動節が、注意深く見ればやはり異なる意味合いを持つ場合は、その意味的相違の成立に関する仮説も提示する。序論の第 1 章と結論の第 5 章を除き、本論文は以下に述べる三つの章から成る。

第 2 章 *-Ni-* and *-ni yotte-passives* (ニ受動節とニヨッテ受動節)

本章では、最も近似する能動節の主語に相当する名詞句が「に」で標示されるニ受動節 (*-ni-passives*) と「によって」で標示されるニヨッテ受動節 (*-ni yotte-passives*) のそれぞれの成立条件及び意味的特徴を詳細に比較する。第 3 章で分析し第 4 章でモデル化する現象を明確にするだけでなく、120 年に亘る先行研究を整理して本論文の非日本語話者の読者に提供し、簡潔な一般化に統括することもその狙いの一つである。

ニ受動節の成立条件に関しては以下の一般化(I)-(XVII)、ニヨッテ受動節の成立条件及びニ受動節とニヨッテ受動節の意味的相違に関しては一般化(XVIII)-(XXIII)を提示する(詳細を一部省略)。一般化(XIX)と(XX)は同じデータを捉えるものとして提示するが、どちらがデータをより正確に捉えたものであるかについては立場を採らない。

- (I) ニ受動節の適格性は、主語の指示対象が非情物であればあるほど低くなる。
- (II) 非情物主語のニ受動節の適格性は、益岡隆志氏が提唱した潜在的受影者 (implied affectee) が関与する解釈、すなわち節の表す事象から有情物が影響を受けるという含意を含む解釈が可能であればあるほど高くなる。

- (III) 非情物主語のニ受動節として解釈できるものの適格性は、「に」で標示されている位格、向格または奪格の名詞句を含む同一の真理条件の適格な短縮受動節(能動節の主語に相当する名詞句を含まない受動節)としての解釈も可能であればあるほど高くなる。
- (IV) 非情物主語のニ受動節の適格性は、益岡隆志氏が提唱した**属性叙述受動節**(subject-characterizing passives)としての解釈、すなわち主語の指示対象の有意な属性の含意を含む解釈またはそれが明示的に表されているという解釈が可能であればあるほど高くなる。
- (V) ニ受動節の適格性は、主語の指示対象を Edward L. Keenan 氏の提唱する**独立存在性**(independent existence)を有するもの、すなわち節の表す事象と独立して存在しているものと見なすことが不可能であればあるほど低くなる。
- (VI) 非情物主語のニ受動節の適格性は、漢語動詞が用いられていれば高くなる。
- (VII) 非情物主語のニ受動節は、二名詞句の指示対象が非情物、非人間的または不定であればあるほど高くなる。
- (VIII) ニ受動節の適格性は、真理条件、項の数及び主語がすべて同一である能動節が存在すれば低くなる。
- (IX) ニ受動節の適格性は、二名詞句の指示対象が節の真理条件と両立しない別の意味役割を持つ解釈も可能であればあるほど低くなる。
- (X) ニ受動節の適格性は、出来事よりもその出来事がもたらした主語の指示対象の結果状態が際立てば際立つほど低くなる。
- (XI) 対応する能動節における主観的形容詞を直接目的語や間接目的語の指示対象についての表現として解釈することもできるのに対して、ニ受動節における主観的形容詞は話し手と主語の指示対象のどちらかについての表現としてしか解釈できない。
- (XII) 文が二つのニ受動節を含み、一方のニ受動節の主語と他方のニ受動節の二名詞句の指示対象が同一で、一方のニ受動節の二名詞句と他方のニ受動節の主語の指示対象も同一であれば、その文の適格性が低くなる。
- (XIII) ニ受動節の適格性は、二名詞句よりも主語が指示性が低ければ低いほど低くなる。
- (XIV) ニ受動節の適格性は、三人称の主語が一人称または二人称の二名詞句と組み合わせられていれば、あるいは二人称の主語が一人称の二名詞句と組み合わせられていれば低くなる。

- (XV) ニ受動節の適格性は、その主語が必然的に主語になる構造に埋め込められていれば高くなる。
- (XVI) ニ受動節の適格性は、ニ名詞句の指示対象よりも主語の指示対象が主題性が高ければ高いほど高くなる。
- (XVII) ニ名詞句の適格性は、ニ名詞句の指示対象よりも主語の指示対象が有情性が低ければ低いほど低くなる(一般化(I)、(VII)、(XIII)の三つを、この一般化及び一般化(XIII)の二つに還元できる)。
- (XVIII) ニヨッテ受動節の適格性は、「によって」の意味が節の表す事象と両立しなければしないほど低くなる。
- (XIX) (a) ニヨッテ受動節は、ニ受動節と比べて、「によって」の意味により、出来事よりもその出来事がもたらした結果状態及びニヨッテ句における名詞句の指示対象がその結果状態の原因であることが際立つ。
- (b) 受動節は、出来事よりもその出来事がもたらした結果状態及び最も近似する能動節の主語に相当する名詞句の指示対象がその結果状態の原因であることが際立てば際立つほど、動詞の表す事象における主語の指示対象の経験や立場についての含意を含む解釈の蓋然性が低くなる。
- (c) 動詞の表す事象における主語の指示対象の経験や立場についての含意を含むものとして解釈されない節であればあるほど、その節はフォーマルな表現として感じられる。
- (XX) (a) ニヨッテ受動節は、ニ受動節と比べて、フォーマルな表現として感じられる。
- (b) 受動節は、フォーマルな表現として感じられるものであればあるほど、動詞の表す事象における主語の指示対象の経験や立場についての含意を含む解釈の蓋然性が低くなる。
- (XXI) 受動節の適格性は、漢語動詞が用いられていれば高くなる(これは一般化(VI)の適用範囲を広げたものである)。
- (XXII) 能動節及びニ受動節、ニヨッテ受動節はいずれも、数量詞主語が数量詞目的語や数量詞ニ名詞句、数量詞ニヨッテ句と共起する場合、曖昧性なく数量詞主語の方が作用域が広い。

(XXIII) 能動節及びニ受動節、ニヨッテ受動節はいずれも、数量詞主語が、文を修飾する副詞句としても述語を修飾する副詞句としても解釈できる数量詞副詞句と共起する場合、数量詞主語の方が作用域が広い解釈も、数量詞副詞句の方が作用域が広い解釈も可能である。

第3章 Markedness-based analysis (有標性による分析)

本章では、日本語において能動節と受動節のどちらが用いられるかが、所与の状況におけるそれぞれの相対的有標性によって決まるとする分析を提示する。また、その相対的有標性が複数の独立した要因に左右されると主張する。

分析は、以下の有標性階層 (markedness hierarchies) と仮説から構成されている。仮説(A)、(B)(a)–(d)は一般化(V)、(VIII)、(XI)–(XVII)と、一般化(XXII)の一部を捉えたものである。ニ受動節とニヨッテ受動節の違いに関する仮説(C)、(D)を受け入れる結果としては仮説(B)(a)がニヨッテ受動節には当てはまらないということになる。仮説(E)、(F)は一般化(III)、(IX)を、仮説(B)(e)、(G)は一般化(III)、(IV)を、そして仮説(H)は一般化(XXI)を捉えたものである。

有標性階層

(a) 有情性	人間	>	非人間的有情物	>	非情物
(b) 独立存在性	有独立存在性	>	無独立存在性		
(c) 人称	一人称	>	二人称	>	三人称
(d) 主題性	高主題性	>	低主題性		
(e) 指示性	高指示性	>	低指示性		
(f) 意味役割	動作主	>	非動作主		
(g) 文法役割	主語	>	非主語		

- (A) 次の二つの事実により、同一の真理条件の能動節と比べて受動節が固有的に有標である。
- (1) 有標性階層(f)においては動作主より非動作主が有標で、そして有標性階層(g)においては主語より非主語が有標である。したがって、
 - (i) 動作主主語より非動作主主語が有標で、非動作主非主語より動作主非主語が有標である(有標性逆転)ため、
 - (ii) 同一の真理条件の能動節(動作主主語及び非動作主非主語)より受動節が有標な主語(非動作主主語)及び有標な非主語(動作主主語)を有する。
 - (2) 受動節は、同一の真理条件の能動節には現れない受動態標識-(r)are-が動詞語幹に付加される。
- (B) (a) 所与の述語項構造の表現として同一の真理条件の能動節と受動節が存在すれば、そのうち無標な方が用いられる。
- (b) 能動節の有標性が受動節固有の有標性を超える場合にのみ、同一の真理条件の能動節よりも受動節が無標であり得る。
- (c) (1) 最も無標である主語の文法役割を動作主名詞句に充てることの有標性と
 (2) 比較的有標である非主語の文法役割を非動作主名詞句に充てることの有標性が合わせて受動節固有の有標性を超えれば、能動節の有標性が受動節固有の有標性を超え得る。
- (d) (A)(1)(i)にもかかわらず、最も無標である主語の文法役割を動作主名詞句に充てることは有標性階層(a-e)において動作主名詞句とその指示対象が有標であればあるほど有標であり、比較的有標である非主語の文法役割を非動作主名詞句に充てることは有標性階層(a-e)において非動作主名詞句とその指示対象が無標であればあるほど有標である(有標性逆転)。
- (e) 話し手が非動作主に関連する含意、例えば
- (1) その非動作主に関連する潜在的受影者が節の表す事象から影響を受けるという含意、あるいは
 - (2) その非動作主が何らかの属性を有するという含意
- を意図すれば、その非動作主の主題性が高くなり得る。そして、有標性階層(d)によると、非動作主の主題性が高くなればなるほど、非主語の文法役割を非動作主名詞句に充てることの有標性が高くなる。

- (C) (a) ニ受動節における、対応する能動節の主語に相当するニ名詞句は項である。したがって、直接ニ受動節は対応する能動節と同一の述語項構造を表すことができる。
- (b) ニ受動節における、対応する能動節の主語に相当するニ名詞句は、対応する能動節の主語が能動動詞から付与されるものと同じ意味役割を受動動詞から付与される。したがって、直接ニ受動節と対応する能動節の真理条件は同じである。
- (D) (a) ニヨッテ受動節のニヨッテ句は副詞句、つまり付加句である。したがって、直接ニヨッテ受動節は最も近似する能動節と同一の述語項構造を表すことができない。
- (b) ニヨッテ受動節のニヨッテ句における名詞句の指示対象は、「よる」という動詞から意味役割を付与される。したがって、直接ニヨッテ受動節と最も近似する能動節の真理条件は必ずしも同じではない。
- (c) ニヨッテ受動節のニヨッテ句は必ず、文を修飾する副詞句ではなく述語を修飾する副詞句として解釈される。
- (E) (a) 形式的に曖昧な節は、最も無標な解釈が最も好まれ、最も有標な解釈が最も好まれないように、どの解釈が好まれるかがそれぞれの相対的有標性によって決まる。
- (b) 形式的にニ受動節としても短縮受動節としても解釈できる節は、前者の解釈においては動作主非主語が現れているのに対して後者の解釈においてはそれが現れていないため、短縮受動節としての解釈と比べてニ受動節としての解釈が固有的に有標である。
- (c) ニ受動節において、形式的に対応する能動節の主語に相当するものとして解釈できるニ名詞句が複数現れている場合は、それぞれの解釈の真理条件の相対的有標性がそれぞれの解釈の相対的有標性を左右する要因の一つである。
- (F) 形式的に曖昧な節の適格性は、話し手の意図した解釈を同定することが聞き手にとって困難であればあるほど低くなる。

- (G) 真理条件以外の意味を意図しなければ受動節よりも能動節が無標であるにもかかわらず話し手が受動節を用いた場合は、聞き手は
- (1) 主語の指示対象に関連する潜在的受影者が節の表す事象から影響を受けるとい
う推意や
 - (2) 主語の指示対象が何らかの属性を有するという推意
- のような主語の指示対象に関連する**推意(implicature)**を含む解釈に至り得る。話し手がこのような推意を意図したならば、話し手にとって主語の指示対象の主題性がそれによって高くなり、受動節の有標性が低くなっていたことが聞き手にも分かるためである。
- (H) フォーマルな文脈等の有標な文脈では、非動作主主語、動作主非主語、そして受動態標識-(r)are-の動詞語幹への付加の有標性が低くなり、動作主主語と非動作主非主語の有標性が高くなる(有標性逆転)。

第4章 Optimality-Theoretic model (最適性理論によるモデル)

本章では、第3章で提示した分析に基づいて**最適性理論**(Optimality Theory; OT)によるモデルを提示する。

まず、日本語において所与の意味の表現として能動節と受動節のどちらが用いられるかの選択をモデル化する。所与の意味に対して最適な形式を選ぶという発話過程をモデル化するのであり、「OT 統語論」の一例となる。意味的述語項構造を入力とし、能動節と受動節を出力候補とする。主な制約としては、**調和的整列**(harmonic alignment)という手順を有標性階層に適用して得られる、有標な文法役割付与パターンにペナルティを与える有標性制約を用いる。なお、標準最適性理論では、制約が言語によって異なる順序を成し、順序において高い位置を占める制約と低い位置にある制約の間に厳格的な支配関係があるとされるが、日本語における能動節と受動節の間の選択における制約の相互作用を正確にモデル化するためには、厳格支配の原理を受け入れず、制約のそれぞれに実数の加重値が付与されるとすべきであると主張する。その結果として、厳密には、最適性理論の前身である**調和文法**(Harmonic Grammar)によるモデルとなる。

次に、仮説(E)、(F)に関連する例文、つまり形式的に曖昧な受動節の解釈過程をモデル化する。所与の形式に対する最適な意味の選択をモデル化するのであり、「OT 意味論」の一例となる。

発話過程で適用される制約が解釈過程でも適用されるという立場を採る。さらに、意味的内容の信じがたい解釈にペナルティを与える制約を採用する。

最後に、解釈過程においては発話過程も参照され、発話過程においては解釈過程も参照されるという**双方向性(bidirectionality)**をモデルに加える。発話過程において話し手の意図する推意を入力の一部とし、解釈過程において創造的な解釈にペナルティを与える制約があるとして、双方向性を用いて仮説(B)(e)、(G)をモデル化することができると述べる。推意の発生という語用論的現象をモデル化するのであり、「OT 語用論」の一例となる。